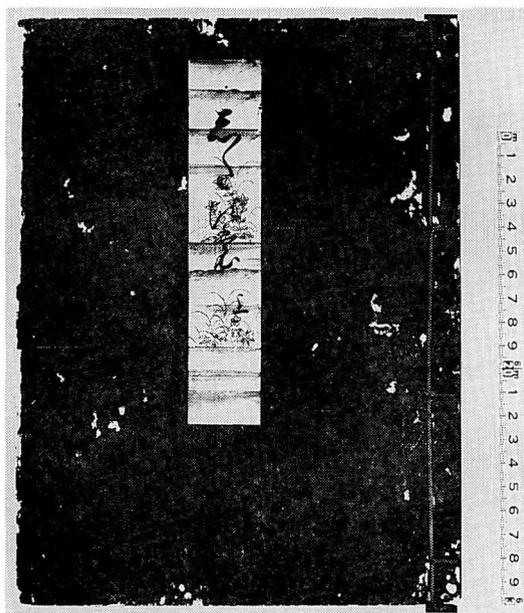


常磐松文庫蔵 『狭衣下紐』 寛佐奥書本

奥田勲



懐中一七ゆりたり杵荒源氏物語の
 口より人々へは初より一七ゆり
 糸指圖を續くと歌ひよりより種
 大く改らるゝ系圖(道念院及の
 ろくろを)ゆりより一七ゆり
 らへへへ初よりとありゆり
 正五十八年初より一字をえり

洪孫半醒

後系系圖

宇多天皇 五十九

醍醐天皇 廿一

朱雀院 廿一

村上天皇 廿一

冷泉院 廿三

國融院 廿四

一條院 廿六

後朱雀院 廿九

花山院 卅五

三條院 卅七

小一條院 元祿所也

一條院 卅八 後冷泉院 卅

二條院 長徳 三 源氏物語 他 寛弘 藤原長保 寛弘 也

顯光 兼任 右大臣 時右大臣

堀河殿 以物指より 今 三 融院 次 二 以

子より

師輔 右大臣 九条殿 伊平 兼任 公 兼任 公

坂城殿

兼通 大政大臣 兼任 公 堀河殿

今上 後系大將也

兼通 為時 環中 納言 孫

策式部 源氏物語 九衛門 權佐 宣卷 孫

生 天武 三位 後系 作者

一 以物指者 源氏物語 而 叙 也 又 者 乃 大將

次 源氏物語 三 以物指 又 花山院 卅五 也

宇多 御門 卅三 王 後 院 卅 也

治 少 子 小 兼 茂 氏 御 孫 次 始 也 後 時 也

系 之 也 孫 三 以物指 又 者 乃 大將

原此中書物に於て一は源氏物語
ありしよりしてわづらひしものい
ふにさうしてさゆはさうは沙汰
美給れ寛平元年十月より陸奥
祭あり

一内代不恒一祭は寛平の源氏物語
元より四十年より恒源氏物語心
ゆあり人へは釋よよよさうしり

一廿年の志 常磐言 陸奥国播磨年を
そらりね年とほ名年れ也也色花
陸と云らぬ也

一中宿の敷の暮より一はよりなれぬ
花はありこととさへはる洞より
一升ののりより一ははやせり
こころ今よりあはれ唐といふ可也
胡蝶巻のりなり也

一竹童 周新 香融院

一源氏物語の志と辨太右の志を
ひらいてしと也秘天七ありしなり
ありぬのはたのりなり今より衣の世也
中宿を中宿源氏との志也

一うへもきせ 二人の志也
一善天 一祭は
一善の志の 級字也とさうしり
級字とさうしり
一善の志の 百歳の年ありしなり

一善の志の 白より善の志の山
むらりの中はしり
一善の志の 山吹の志なり衣也
一善の志の 山吹の志なり

一善の志の 山吹の志なり
一善の志の 山吹の志なり
一善の志の 山吹の志なり
一善の志の 山吹の志なり
一善の志の 山吹の志なり

三六よりの如く人の言とまかり

一とわめくくふふり心づう一とやほま

みのらうる

一室のや一り川平お初へを添う

一ほうのの松 思と取えんも及まきよわ

一と二葉ら姉妹兄弟れしくわてと

一と地高向う更勝といも好といや

一と大層母天さると一と花おほいしうとと

一とけり 芒草のの地みれりやわ

一と院院の地いん びととやうん中すみ

一のぼろと云まをかり

一と生んきれいとうと 蘇我の四女

一と院 高政を片 後一と院四柱又

一と坊門を帝四子 政のまの四しとあや

一と今と 法法院一とまきまき坊のこれ

けはうり

一とつの中にも 堀川屋の坊のありあり

一の秋めはてえのうし 藤とまきま

まうふ事とまかり男まきうとく 枝

衣のうし

一と信仲物 ち女の苗屋へ六道とほ

一とつてたてうし始つてと

一と月十六 三千摩訶切のし一と大通智

一と勝佛とく私くくくうはぬいと

一と臣位の河内子十六あり放道のはは

一と一語しては身とよりたつ入滅のな

一と人菩薩蓮花と利益一と十方

一と方一と仏と放たう月十六萬の神の

一と別は無縁母かうと放たうとまきま

一と刻今日の釈迦如來なり

一と下りてうりのとまよたかすれ神

一と春らつたを風いん

一と世とつらそりふとあつて道にある

一と母よわりのつらふとつらふとつら

一と種と世と人のみれりまきま

一とこととつらふと

心づり

- 一 大まき 太政大臣のしとめと姫君
- 一 下りの娘は 一条院へついでん
- 一 時より 東院の人権月日の秋方
- 一 春文 後一条院 旧とト一二条院
- 一 中納言より 忠告より 菅浦もふ
- 一 さかむ 燃らたひのこ
- 一 十市のま 引立奉勅 八まの板方と
- 一 只まよふ 十市に別より

- 一 ふみとと 菅浦にむかひてそと
- 一 とくわとと 海方よこめれとと
- 一 まつととと 越ととひととお共
- 一 一日のそととと 海方菅浦の
- 一 一夜のそととと きのひととと
- 一 とつととと 菅浦の
- 一 扇紙等 扇七次り 菅浦の
- 一 菅浦氏より 菅浦のそととと
- 一 一ととと 菅浦 菅浦のそととと

一れん

- 一 菅浦大は 菅浦のそととと
- 一 菅浦車の 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと

- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと
- 一 菅浦のそととと 菅浦のそととと

一 二ふひのそんよ 命奏はくし 柱く
との勅をり

一 中務文

一 中務 弘徽殿之大夫御奏の御入
御君 御君御前之御奏の御入
御入の御入の御入

一 中にも 弘徽殿之大夫御奏の御入
御入の御入の御入

一 弘徽殿之大夫御奏の御入
御入の御入の御入

一 山さへ筆のぞくもさのきりあり
 何ぞ心とよのこしめし

一 毛よりしれけけさるたいもさ藤より
 子奴との橋も頼もくせん

一 衣のすくも衣竹をれしくはらひ
 とまゝか人のまことし

一 身色如金山 端巖甚微妙 法華摩品
 軟きれたを洗ぬんよとの端も白毫
 相のそくもさ方方へ十八世界を起す

一 狭衣下紐を五孔園をのぬれ月相のす
 一 さまとていふ文あり

一 わりありわりありが 又常率天
 のしるこころをさしむ

一 三月のそ

一 ちるふ鳥 極道のほろ鳥へ三つさふ
 二あり 巨摩言

一 人いゆくまのいのちりこ
 秋のくのもちのなれりくあり

一 胸如火赤し んどのそんとすきへぬち奴
 不吉とく

一 秋夜 洗鏡院中三徳氏をたのむこ
 一 五平内は自記不見 伴舟御深う
 一 女一夫と句字とのり徳氏をた
 二 解る不わり

一 秋より 意入の程昔よりだすま
 也衣を年へて徳氏をたのむこつと
 一 若かり 吉野川若かりと所の
 水のそへそくあひりわとも

一 よつあま川言事勅

一 若と ば秋の秋久うつんと

一 まるへさへく 美英の四巻やうの
 ちとあひりも也

一 水とりのくも 徳氏をたのむこつと

一 わりあり 川言事勅

一 う人も 四門の衣を同車して若かり
 言とあひり

一源氏物語を大いにしるすべし

一右大臣 南無天竺に志願おぼえ

一信長公の 貴位殿のむすぶふし

一はつたきとて 長天にけいけい

一権中納言 在るに 一栄院院

一東院上 在るに 一権中納言 喜喜交

一文書 在るに 一栄院院

女の海流より

一源氏物語 新すは 海流のつらむら

一信長公の 貴位殿のむすぶふし

一はつたきとて 長天にけいけい

一権中納言 在るに 一栄院院

一文書 在るに 一栄院院

りの方より玉を賜ひて見事降参
し長門守殿としし中務文の
少納言のく大納言殿大納言と
二奉りまじし南法ははりすとまじか
筆を下すかまじり

一 中大納言殿の口しと春夜は母
坊のところが殿にありすし文を
まじりてまじり

一 御座中の才とまじり

相二招き其て 秋とありしものと
と相わりの心しとまじりて因心か
ころりそ又わらうらうらと和字は
玉鬘りまじり

一 くらりく春夜とまじりわらうら
とまじりて

一 中納言長源氏文のうはみは
殿のまじりまじりて作らうら
まじりてまじりてはらうらとまじり

り後一西より

わらうらまじりて文書とまじり
まじりて月とまじりて

一 春夜 玉鬘りよりまじりて
入りの藤の草のまじりて
まじりてまじり

一 くらりて 春夜をまじりて
まじり

一 くらりて 春夜は初とのまじり

まじりてまじり

一 くらりて 初夜はまじりて
まじり

一 くらりて 春夜の口より

一 くらりて 春夜とまじりて
まじり

一 くらりて 春夜とまじりて
まじり

一 くらりて 春夜とまじりて
まじり

まじりあつたは俺一ばんく
きたよとてとば神もさびた
りてゆんはうふふひくそあふ
いとあひすくあふととたつて
やゆんく風流作の家徳家つて
まじりあつたは俺一ばんく
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ

まじりあつたは俺一ばんく
きたよとてとば神もさびた
りてゆんはうふふひくそあふ
いとあひすくあふととたつて
やゆんく風流作の家徳家つて
まじりあつたは俺一ばんく
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ

徳家のゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ

徳家のゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ
とてゆんはうふふひくそあふ

一 せんごのへ 明の志馬ととらり 師中

細まの娘と華人のこ

比と母をいひてこ

一 さいかみ せんごのへとらり 師中

事とすのへにわらひ 師中

は 師中

一 せんごのへ 師中

とらり

一 わりつる せんごのへとらり 師中

せんごのへとらり 師中

いふこと せんごのへとらり 師中

一 せんごのへ 師中

まこと せんごのへとらり 師中

せんごのへ

一 せんごのへ 師中

せんごのへとらり 師中

せんごのへとらり 師中

せんごのへとらり 師中

せんごのへ

せんごのへ

一 せんごのへ 師中

せんごのへとらり 師中

一 せんごのへ 師中

せんごのへとらり 師中

せんごのへとらり 師中

一 せんごのへ 師中

せんごのへ

一 せんごのへ 師中

せんごのへとらり 師中

せんごのへ

一 せんごのへ 師中

せんごのへとらり 師中

一 八んちや 顕隆 わつらうの源氏初孫
たれわり俗とくまんりや

一 天のつらうへ 梅の夜れらふと一葉の
まをり初めると鳥や啼まんん

と侍らんしやる花を井とあひひや
いふて

一 天さきりつははせいづのいせんや
勝つまいと地へつと向後へとまをらふ

いづく母上の懸念をいんけつて一切

別的事の思君つて 源氏若らむむ言
う母とて菴南さくはせし由り

まをらふ人なしく為給つとの御
いささの 侍はれ思君ニまへて

一 天の文をくまつせ給らふのしく
さとしつらあつら女のをまはは
りまきり

一 天のいほく人 二天の事入竹とをま
せしむとて 源氏初孫の例あり

一 二天の事よゆ勅さると

一 天流の東院のいさつといと竹す
うとつらふ今收君の事まをらふ

それとくまうう用とて文のあはると
候らとの給り

一 先帝 式部右大臣 後式部右大臣
源氏宮 坊門上 源氏殿ノ北方戒
中宮ノミヤ

一 律はくちん さいり 様家のついで

一 さいり 様家のついで 人々をいふとてきん

一 きん 様家のついでのついで

一 ついで さいり 様家のついで

一 女が、奥の身からして、さういふ
 じま後で、極衣と、又、今を、始つて、素
 の、女着、を、い、り、い、ま、さ、と、

一 女が、と、今、昔、者、一、般、武、藝、の、ま、の
 け、み、と、若、菜、田、中、わ、ら、む、れ、後、の、ら
 だ、い、よ、ふ、か、と、因、縁、を、き、け、わ、ふ、は、也、

一 又、の、百、五、の、所、第、一、と、娘、若、の、事、
 一、し、り、い、ふ、

一 ち、ら、く、の、な、ん、の、い、つ、で、極、衣、は、子
 一、さ、う、と、い、は、し、り、と、言、ふ、也、

一 本、下、の、き、う、り、と、今、一、始、つ、て、極、衣
 一、れ、は、氣、分、を、だ、い、は、は、し、て、并、に、い、
 一、て、だ、い、あ、か、し、る、ま、し、り、昔、者、か、の、
 一、ま、さ、も、と、り、お、お、と、あ、り、つ、つ、と、極、
 一、と、う、め、き、さ、ま、り、

一 わ、さ、す、と、ね、だ、い、れ、う、を、し、は、い、
 一 極、も、も、の、い、し、す、ら、と、な、ま、て、又、今、
 一 ち、ら、い、い、と、あ、り、

一 い、ま、や、た、い、の、約、り、也、

一 極、衣、と、乳、母、井、の、事、は、は、さ、美、年、
 一 だ、け、若、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 ち、ら、い、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 の、と、い、つ、り、と、今、は、極、衣、は、い、つ、り、
 一 ち、ら、い、と、い、ふ、と、乳、母、十、八、り、男、の、あ、は、
 一 ば、い、と、い、ふ、と、男、の、あ、は、い、つ、り、
 一 ち、ら、い、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、

一 極、衣、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 極、衣、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 折、く、と、い、ふ、と、極、衣、と、い、ふ、と、
 一 入、感、保、神、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 女、の、ま、さ、の、事、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一 ち、ら、い、と、い、ふ、と、

一 一、い、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 一 の、と、い、つ、り、と、又、今、の、事、と、い、ふ、と、
 一 ち、ら、い、と、い、ふ、と、

一人物 源氏の女の子

一とまのり 彼女とあてはつて又

くしてどうも下をせしむるは

一若くも さきの四つにちのこい

なりし如

一吾が 後後わねとたかふん

あといけいさうんきりれまはさ

まうつさのあまはあまあま

うとねとあり

一我の事と 彼女の心算であら

いとあつしとたけりり守るを

くはとわしといや 彼女とあつし

おつしとあつしとあつしとあつし

彼女とは別苗の女とわしとあつし

一彼女とていけり

一はとあつし 彼女とあつしとあつし

あつしとあつしとあつしとあつし

あつしとあつしとあつしとあつし

われはたのびて

一せはまきんうとあつし 彼女とあつし

一りてあつし 彼女とあつし

一あつしとあつしとあつしとあつし

一森のこゝろと 引さす物

一くつあひした 彼女とあつし

一のこゝろとあつしとあつしとあつし

一あつしとあつしとあつしとあつし

一そのしき 彼女とあつし

一とあつしとあつし

一その山路とあつしとあつしとあつし

一あつしとあつしとあつしとあつし

一あつしとあつしとあつしとあつし

一そのあつし

一彼女の乳母とあつし

一武部 太輔 道成

一道季 子孫の四男也

一青陸守 小方

なまふひとすともふいらし嫁妻のり

一 扇の油まのすにけきううにけきえ

うらとく物まふふちり物とり分

ふいともまわく物ま鬼の者も深底ま

一 とうは嫁取とて分ふつて

一 ありけり心徳一 ちきりちきり

一 四支ちきりちきり ちきりちきり

一 ちきりちきり ちきりちきりちきり

ちきりちきり

一 二ふ 道成をけり一 人の車の車り

なまふひとすともふいらし嫁妻のり

ちきり

一 女若 若(井)柳と思えやせと乳母

三 然 扇儀の車指(分)油(分)いなり

一 くの 車指の儀(分)油(分)いなり

一 ちきりちきり ちきりちきり

ちきり

一 下とく 陳家(分)珠(分)母(分)女(分)信(分)わ

かちかちちきり

一 一とこの朝魚のせの后と徳家のなま

ふのら乳母とちきりちきりちきり

すちちちちちちちちちちちちちち

とちちちちちちち

一 ありきと 志茶(分)ちちちちちちちち

とちちちちちちちちちちちちちち

一 ちちちちちちちちちちちちちち

一 一とこの朝魚のせの后と徳家のなま

ちきり

一 一とこの朝魚のせの后と徳家のなま

ふのら乳母とちきりちきりちきり

すちちちちちちちちちちちちちち

とちちちちちちち

一 ありきと 志茶(分)ちちちちちちちち

とちちちちちちちちちちちちちち

一 ちちちちちちちちちちちちちち

一 一とこの朝魚のせの后と徳家のなま

はふたすり

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六
のらまのりかゝりといふなり

一 車 門 板 車 板 車 板 車 板 車 板

いとのり(車) 鴨 車 二 三 四 五 六

子と食つてさういふものゆきけ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

のらまのり

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

一 鴨 車 門 板 と 二 三 四 五 六

いばりてよをなほつんとり

一いばりて 乳母方うてとらうて

まうとやうととてとらうて

とらうと

一らむつりて 乳母板まてまの国

一むわいのせとへ 唐ゆそとらうて

酒茶を可を

一うたさむ わせやめ

方とまんと

一繁くむて 肩り懸持まめ

一かり扇 懐家の冬まよは飯下と

り扇

一取と舟のせい 有涯

一とまき休の 衣風のぼり

けせなと 源氏と朝の表の入れ

たひ

下級才三

一池たりの花 新恒家集に

華しくとわさくらひわつる花とま

てはさきとたりの花

一とくまのの 野たれ一毛丸も

の思まされひやとあうてに

一あつきさ 衣花名并れ表の

ひ

一あつばり

大城乳母 三ノ森清盛

乳母才三と云ふ

常磐松文庫蔵
藤季

常磐守持方

通成光の通季ははりしおてりしと

いとすなはた光吉の母の御給ふと

いそつろいそ今まそ書あつてせり

一 大式なりゆいせうろ交うたれ

一 大版(大式)ほまじはぬくまてそたぬ

一 大版(大式)まきうりしゆた

一 大版(大式)なまのりよとらうりまそと

一 大版(大式)とせりしゆとそまもをな

一 大版(大式)おつしおてりしゆとそまもをな

一 大版(大式)も不性すとらうりしゆと

一 大版(大式)なまのりよとらうりまそと

一 大版(大式)なまのりよとらうりまそと

一 大版(大式)なまのりよとらうりまそと

一 大版(大式)なまのりよとらうりまそと

つらつらつらつらつらつらつらつら

- 一 とうきき 吳方不用
- 一 四の成をわるとして右腹をたすまへ
はてさうー 夫のあひり
- 一 とくして 大原の年よりかきうてい今
けりうるの中は女三三のい事さへんを
- 一 一かきいん 極家さへかろうとわ
十女三三とては門のたしりやうもむむ
- 一 一ありし 大原のききの教をいれ女三三
兄もさうわかれ教のい家人の傳氏
- 一 一ありの四やんをいれはらなうはらう
さういんを傳氏女三三をさすていんとて
- 一 一さうり 女三三はらうと見ありそそそ
とたつわうやんとて
- 一 一女三 女三の母を私親をにほほす
- 一 一女の名のうをきりぬうらりて
- 一 一中書女 女は有るが女は人をもとく
味着ていふは女は女は女は女は
- 一 一女ありしは女とていふは女は女は女は

- 一 一とら大の具とて
- 一 一女三三と見たり 教をいれ女三三
せ起りての約
- 一 一宰相 中書女を表のて一とたわあ
方を極教をいれ今表とあめのおと極
- 一 一太夫あり 女三三のいれはらう
極家さすていんとて女三三は
の乳母といふは極家はらう
- 一 一とら女 女三三はらういれはらう
とらうと極家はらういれはらう女三三
はらういれはらう極家はらう極家
とらうはらういれはらう
- 一 一とら女 女
- 一 一とら女 女は女三三
- 一 一とら女 中くはらういれはらういれ
別の代と物とて女三三はらういれ
とらういれ
- 一 一とら女 女三三はらういれはらう

一 はらりて 女天とのつれとていへ
あけりてあや

一 ちりていへ 女に連れりぬ 女あや
手をとらぬらんをいへ 女あやの書

一 女天の ちりたりとせりていへ
女あやの書

一 女の 女天のいへ
女あやの書

とていへて 女天とのつれとていへ
あけりてあや

一 ちりていへ 女に連れりぬ 女あや
手をとらぬらんをいへ 女あやの書

一 女天の ちりたりとせりていへ
女あやの書

一 女の 女天のいへ
女あやの書

君辱片元

一 かねてより 我々大文の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

君辱片元

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

一 昔より 我々の 衆人 共々
一 今より 我々の 衆人 共々
一 昔より 我々の 衆人 共々

ついでに、（？） 長正長正階雨油

一 長正長正階雨油

ついでに、（？） 長正長正階雨油

一 神山のち

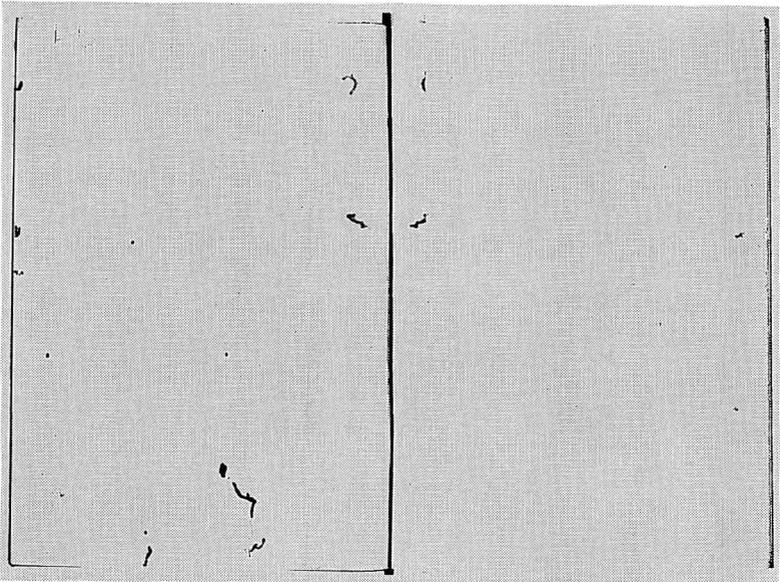
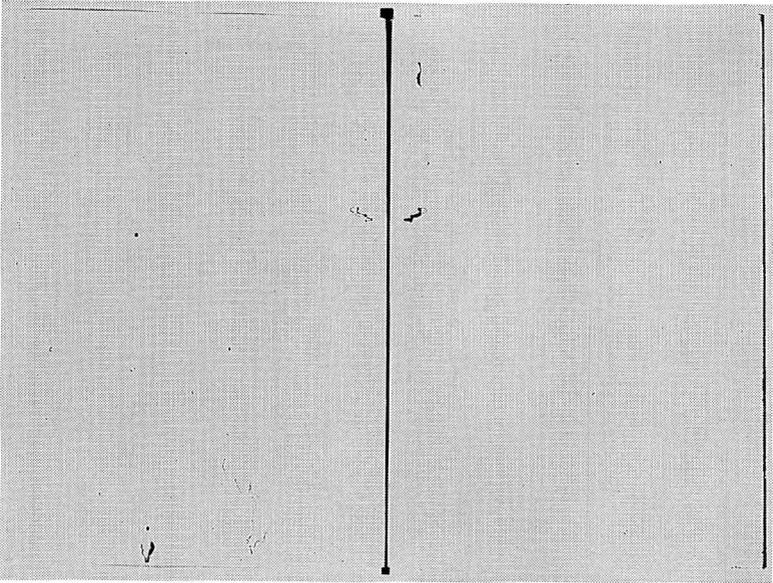
一 藤衣を 藤衣天たりしせしむ
 一 藤衣 藤衣人衣のしりりなり
 一 藤衣 楊貴妃と云う藤衣天と
 去地事後と云云也
 一 今人衣 大文藤衣又一条と云ふなり
 又今人衣藤衣の種はつらと云ふなり
 一 三三の藤衣 藤衣の四つと云ふ藤衣
 藤衣の女三つありて三三の藤衣
 不叶又四つ藤衣二つと云ふなりと云

一 松は大竹入定開春香壁と云ふ言也
 一 衣はまうし 別名は衣は藤衣なり
 一 衣の類はつらと云ふなりと云ふなり
 一 藤衣川藤衣 藤衣天のわひの藤衣なり
 一 藤衣の類 同くは藤衣と云ふなり
 藤衣の類はつらと云ふなり
 藤衣の類はつらと云ふなり
 藤衣の類はつらと云ふなり

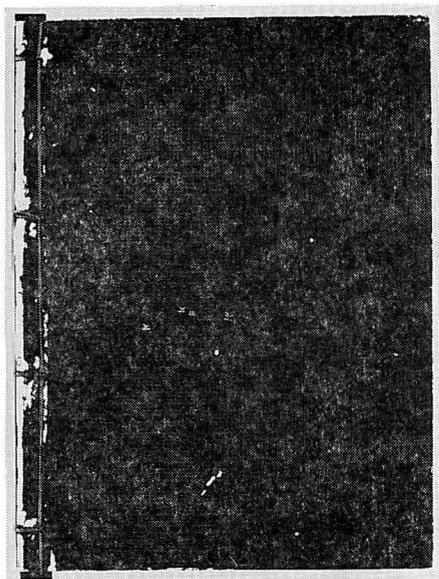
一 女子のつら 藤衣と云ふなり
 一 是人命終 善果を以て善果を以て
 してしてしてしてしてして是人命終善
 生切利天と云ふなりと云

一 堂僧坊修行者 寺寺江列石たは修行
 一 某王母當知 如是諸人等 修行他
 是經難得聞 信受者亦難
 如人渴須水 賢賢於高原
 瓶見乳母土 知志水尚遠

漸見濕土泥 決定知蓮水
 某王母當知 如是諸人等
 不聞法華經 修行甚遠
 然今時為現 清淨光明牙
 若說法之人 我在空閑處
 寂寞無人處 續讀此經典
 我今時為現 清淨光明牙
 弟志共章句 為說今通利



四十三 常磐松文庫蔵『狭衣下紐』



關田眞
之藏書

積古考三

一 吾らとありては在り 物も亦未
日也 屬主也

一 源氏物語の事とありては

一 一々ありて 大敵也云々

一 一の物 一の事とありては

一 吾らとありては

一 吾らとありては 源氏物語

一 吾らとありては 紙澤也

關田眞
之藏書

一 昔より 地獄くもりてそ母のり
 一 心きくや 世をさひつらうなるふ
 一 一より月夜 月夜未劫
 一 一より思ひ 神監せらり
 一 一より思ひ 湯く竹春屋也 神也けと
 一 阿私仙人 目のは師とまはせ 舞るの園位の
 一 時大さくしてはくくは位とてくくは位
 一 一より思ひ 地獄くもりてそ母のり

一 茶橋水ぬで 仙人よほくまき 仙へ今れ
 一 花嫁
 一 一より思ひ 昔よりそ母のり
 一 一より思ひ 湯く竹春屋也 神也けと
 一 阿私仙人 目のは師とまはせ 舞るの園位の
 一 時大さくしてはくくは位とてくくは位
 一 一より思ひ 地獄くもりてそ母のり

一 舟天 女三三三
 一 一より思ひ 昔よりそ母のり

一 一より思ひ 昔よりそ母のり
 一 一より思ひ 湯く竹春屋也 神也けと
 一 阿私仙人 目のは師とまはせ 舞るの園位の
 一 時大さくしてはくくは位とてくくは位
 一 一より思ひ 地獄くもりてそ母のり

一 舟天 女三三三
 一 一より思ひ 昔よりそ母のり

一 一より思ひ 湯く竹春屋也 神也けと
 一 阿私仙人 目のは師とまはせ 舞るの園位の
 一 時大さくしてはくくは位とてくくは位
 一 一より思ひ 地獄くもりてそ母のり

一 舟天 女三三三
 一 一より思ひ 昔よりそ母のり

わんまうろうまると也

一わらわは 草子の池也 一敷の葉のわらわ

よなな ともさ也

一つひより 中納言のさくらもすも

一使へてまじり ちのりわらわ也

一あまはた 草子の池也

一ほこのほは 唐の美奈のほはとはは

りまひ 唐の美奈のほはとはは

わんまうろうまると也

子國事よる也

一母国小 唐の美奈のほはとはは

川原池のほはとはは

也て子も敷のほはとはは

一まふのそを 大政大臣 一茶院也

東院上 秀院宮人 権者末女

一わんまうろうまると也

一おちり 皇の源川殿也

一わんまうろうまると也

のゆは ちて在院廟 以後は

一きまおかり ちのりわらわ

堀原殿のちせとれはともさ也

一こころ 源川殿方ともわらわ

はてしなくともわらわ也

一ちのりわらわ ちのりわらわ

ちのりわらわ ちのりわらわ

ちのりわらわ

ちのりわらわ

一ちのりわらわ ちのりわらわ

一ちのりわらわ ちのりわらわ

ちのりわらわ

一ちのりわらわ ちのりわらわ

ちのりわらわ

ちのりわらわ

ちのりわらわ

ちのりわらわ

ちのりわらわ

一 花よりかたじけなく

一 花よりかたじけなく 花よりかたじけなく

一 花よりかたじけなく

うらそものままとまきとまきとまきと

一 せいせい 青苔紙 朗詠

碧雲掛装華料立柱 青苔紙巻紙の書

一 きせとまき 入夜のは巻とこまきまき

住持つう二巻紙のりて

一 居のきり筆此朝書 筆すのこ思ひつ

まきとまきのりて

一 白ふのせう 在るの狭衣下紐

一 ちひもや 屏二巻紙一系草紙也

うらそものはおらそまきとまきとまきと

まきとまきと

一 白ふのせう 在るの狭衣下紐

一 ちひもや 屏二巻紙一系草紙也

一 幅二巻紙 入道の巻紙也

一 ちひもや 屏二巻紙 一系草紙也

一 ちひもや 屏二巻紙 一系草紙也

一 ちひもや 屏二巻紙 一系草紙也

一 ちひもや 屏二巻紙 一系草紙也

くればまきとまきとまきとまきと

一 ちひもや 屏二巻紙 一系草紙也

このすゝめは

一 年三 彦くやとたかさん也

一 ひろくそと 兼とゆ 一 ちとてこて 行

いふとあんと

一 今一のふあふと ちとてあふま

れくとふま

一 今一のひくきの松 兼

一 一の目と 兼あはると 同存に 一 一

いふとく 兼とてあふま

一 兼あはると 兼あはると 兼あはると

一 一の目と 川平あふま

一 兼あはると 兼あはると 兼あはると

陽気家とてあふま

一 兼あはると 兼あはると 兼あはると

尼衣を承く之をい

一院をいす 新秋院也

一小室相

常盤尼平 小室相 一室後の常陸代女寺に
本語く此の所へ女
門寺をいふなり

筑前少方

一非衣 三衣のほに 花鳥并 脈也 色はけい
四女のすまひ也

一つらつら 小ひりたり

一衣の二衣 衣

一志のいほく ほうくそしおひりやうま
と云也 ほうくそしおひりやうま

一他たつ 志をいふもくをいふ也

一殿くら 輝河殿くら也

一舟院 賀茂入られた河川也

一志のい 源氏宮入るも物もい

一ゆせき ぼ源縁

一くろく 一玉衣の猫と云ひすも
一岩をいふ水 川をいふ

一ゆりむの 一玉衣の衣也

一あやうり 源氏宮入る也 せんときさ
くいせき也

一折れたれもの 一玉衣をいふもいふ
けと源氏宮入る也

一七傷 大備法師也 源氏宮入る也 阿鼻獄
一ろくろり 源氏宮入る也

一吉野川 源氏宮入る也

一とされと 死をいふと評して入水も

一三連川 源氏宮入る也

一皆か金也 阿鼻獄 東方八千廿五
力をいふ也 花鳥并也 花鳥并と云
ゆるといふも物也 源氏宮入る也

一舟小 善見の船也 源氏宮入る也

一あやうり 源氏宮入る也

一下の家と けいせき也

一 大白牛車 以花一鉢葉もつる長
者(釋迦如來は三衆の模れ舎り
弗力の三摩也はたを(三摩也
一 優のころ平 ありき

釈教者

一 ひりより 摩訶の林林夢想也所
在母の心よりさうさうさうさう
位のりきす也
一 淨花淨眼の 妙莊嚴王の悪とて
しつかりは二人のほまとい母の淨花
夫人と雲雷者若王花智のほま
てさうりといふ又の悪王とてさうり
さうりといふ神國は女遊行とて見え

られき(又また大教をてりとい
何れは有り福し七衆を者と然り
其其の妙莊嚴王今は花淨也神
住又(との仏をえん無莊嚴お井也
佛身淨眼(との善とまを井也
一 舍利弗却濁札時 衆生垢重愆貪
壞垢成就諸不善根故諸佛以方便
力於一佛衆分別説三十方善衆本
轉三衆三衆の(りき)

一 院の人 世落也
一 入窟居者(内家の所ち
一 一りまは(方角の道あり三衆
りりり
一 一りり 心ゆく奥ひりたり居て
一 一りり 引まきたり(心智の紙
一 一りり 心ゆく也
一 一りり 一りり(心ゆく也)

一 二のうらぬ 林也

一 林がふ 齊藤は東よりしりし心
也 松原よりしりし心と云ふ人も也

一 松原よりしりし心 松院と春彦と云ふ人も
也

一 二の六千世家 一頃六千り小千と
云ふ小千と云ふ中世家ト号中世家
千の三千大世家也

一 三十二相 仏の才たは佛よりお録か三
十二也

一 中勢 三家の大勢の人の夜帳を
中と云ふ 中勢也

一 神のいしるたに 神は地入よりいしるた
ゆとく考ふて人よりしりし心と云ふ
源氏家のいと神(おのり)と云ふ人も
也

一 一とんたは位(所)も瀧相也

足す

一 存の作 空想及く系曲

一 のとらへり 新の曲くもるは有
る也

一 一とせとせり 二家の言也はとせり
白とせり 新の曲くもるは有
る也

名物也 非物也

一 白とせとせり 二家の言也はとせり
白とせり 新の曲くもるは有
る也

一 一とせとせり 二家の言也はとせり
白とせり 新の曲くもるは有
る也

知りしなり

一 天を 蒼天と 緋天と まいりて 蒼天と 緋天の 相也

一 わつらうと へんすうの ことなり

一 わつらうと へんすうの ことなり

一 大さば へんすうの ことなり

一 つつと へんすうの ことなり

一 さの 後乃 四時 へんすうの ことなり

一 ひとの ありなり へんすうの ことなり

一 くれわりの 事なり へんすうの ことなり

一 茶子の 地なり へんすうの ことなり

一 神の ことなり へんすうの ことなり

一 へんすうの ことなり へんすうの ことなり

一 一等 覺 菩薩の 極位也 十位 十行 十

廻向 十地 等 覺 妙 覺 之 こと 別 勢

四十二位 十地 妙 覺 佛 也

一 水の 白濁 濁り 濁り 濁り 濁り

源氏字 源氏字 源氏字

一 くれわりの 事なり 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 一等 覺 菩薩の 極位也 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 くれわりの 事なり 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 一等 覺 菩薩の 極位也 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 くれわりの 事なり 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 一等 覺 菩薩の 極位也 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 くれわりの 事なり 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 一等 覺 菩薩の 極位也 源氏字

一 へんすうの ことなり 源氏字

一 何れもふをききし今もきく長り
をを

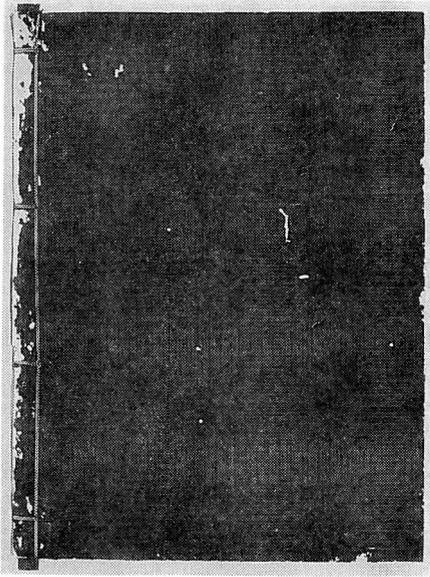
上池
 一消そのむろ心物也
 一乃らりり 同

此物染のそと源氏書は柄の四款
 也故年と書そそ物もろり書そそ
 乃らり四母と合部も心あり乃らり
 乃らり後生あ人そららるる

此杖二母若五年小呂依所積と合
 書字今合又ハは信田杖分極大
 寛佐
 元和二年 慶鐘朔日

寛佐

1



解題

『狭衣下紐』は狭衣物語の古注の一つとして夙に知られているものだが、その内容や性格については必ずしも全面的に明らかになっているとは言いがたい。本学図書館は種々の経緯によって狭衣物語関係典籍を豊富に所蔵し、この物語の制作と流布、さらにその解説の努力とその結果としての注釈を総合的に展望するための環境に恵まれていると言ってよいだろう。すなわち、一つの物語が次の、さらに次の時代に引き継がれてゆく時、各々の時代の読者はどのようにそれに向き合うのか、それを具体的な形で追究することが可能ではないかと思われる。

如上の研究の端緒としてここに『狭衣下紐』を影印に付して提供する。それは寛佐の奥書を持つことで「寛佐本狭衣下紐」と呼ばれるもので、『狭衣下紐』の成立・展開上重要な位置を占める一本であると考えられる（注一）。

*

実践女子大学図書館蔵常磐松文庫本『さころも』（M.74314-9）は写本六冊が同体裁で一括されているが、第一冊から第四冊までが狭衣物語であり、第五・六冊が狭衣下紐となっている。全冊一筆である。全体は溜め塗るかぶせ蓋の木箱（縦二十七・八糎、横二十二・〇糎、高十四・八糎）に納められ、蓋に「さころも」と直書きされている。同じ蓋の手前側面に「さころも／元和四年／連歌師 寛佐／書写」の貼紙がある。

第一～四冊の書誌の概略を記す。

江戸初期写、袋綴装、紺色地表紙（金泥にて小松・草花・山等を描く）、料紙楮紙、縦二十七・八糎、横十八・七糎、
「岡田眞ノ之藏書」復廓朱長方印、一頁九行、一行約二十字、

（外題）（表紙中央に短冊題簽、雲・秋草等の文様あり）

さころも一（第二冊以下もこれに準ず）

第五・六冊、すなわち狭衣下紐の部分の書誌を記す。

○狭衣下紐上

江戸初期写、袋綴装、紺色地表紙（金泥にて小松・草花等を描く）、料紙楮紙、法量同前、前後二紙の遊紙を含め
九十五丁、遊紙一オ右下に「岡田眞ノ之藏書」復廓朱長方印、一頁九行、一行約十七字、

（外題）（表紙中央に短冊題簽、桔梗文様）

したひも上

○狭衣下紐下

体裁等上册に同じ、ただし、五十六丁（後の遊紙に奥書記載あり）、題簽は秋草文様、

（外題）したひも下

（奥書）

本云
此抄二冊者去年以昌倪所持之本令

書写之今茲又法橋昌琢按本按之了

元和四年應鐘朔日 寛佐

本書はこの奥書の示すところに従えば、寛佐が元和三年昌俣所持の狭衣下紐を借り受けて書写せしめ、翌年昌琢本によって校合し十月一日にその業を完了したものである。寛佐は慶長十三年（一六〇八）頃から連歌作者として現われる人物で、多くの作品に名を留めているが、寛永十五年（一六三八）二月五日の昌琢法眼三回忌追善の独吟百韻（京都大学蔵本）を作品の最後にして、寛永十九年（一六四二）に没している。昌琢圈にあった連歌作者であり、狭衣下紐の書写・伝承にかかわるべき立場にあった人物である。寛左がどのような立場でこの下紐を編集あるいは書写したかはひとまず先行研究及び後考に譲り、以下影印によって紹介することとする。

なお、寛佐本下紐として現在所在の知られているものは、本学所蔵本以外に、大阪女子大学図書館蔵本（江戸初期写）、彰考館文庫蔵本がある。

（注一）『狭衣下紐』については次の研究が公刊又は発表されている。

中田剛直「狭衣下紐諸本考」（永山勇博士退官記念会編『国語国文学論集』、風間書房、昭和四十九年三月）

中城さと子「昌叱註から観た狭衣註釈書『下紐』諸本」（『解釈学』第十二輯、平成六年十一月）

長尾佐知子「狭衣下紐諸本考」（平成六年中古文学会秋季大会口頭発表）